

11-6 弥生後期集落の成立と展開

二子塚遺跡は、弥生時代の集落全体を調査した例として大津町西弥護免遺跡に次いで、2例目の調査である。調査区の限界から集落の南部における住居の様相について詳細な議論ができない等、些か包括性に欠く部分はあるものの、弥生時代後期の集落像を示すには十分であろう。

なお、集落の南側には迫地形とその崖面が控え、東西は迫地形から伸びる支谷で画されている。これら南側は集落の背面、東西は側面であり、集落の正面は熊本平野を望む北側である。このことを前提に、以下、記述を進めていく。

1 甕棺墓の成立

二子塚遺跡における弥生時代の集団は、甕棺墓の存在から中期後半に形成されたと考えられる。ただし、造墓を行った人々は、少なくとも本調査区の中には生活の痕跡を遺さなかったとみられ、仮に調査区外に集落を営んだことを想定しても、墓域の規模からみる限り、その規模は大きくはなかったであろう。二子塚遺跡から西へ約1kmほど丘陵を下ると、石塚遺跡と呼ばれる集落址がある。この遺跡は出土した土器から弥生時代中期後葉から後期初頭に属すると考えられるが、環壕を備え、甕棺、石蓋土壙墓等からなる墓域と隣接している。これらのことから二子塚遺跡の甕棺墓域とその造営集団の集落規模は石塚遺跡には及ぶことのない、その衛星的な存在であったと推測される。

2 集落の成立

次に、二子塚遺跡で集落の造営が始まるのが後期中葉である。調査区外のため発掘調査はできなかったが、調査区の西側に現在でも湧水を確認できる地点があり、そこには手を入れれば掴めるほど大量の土器片が含まれていた。この湧水の存在こそ二子塚遺跡の発掘調査契機になるのであるが、当時においても人々が生活を営む必須条件となったのであろう。

しかし、集落形成は甕棺墓の造営時期に直接後続するのではなく、後期前葉を空白の時間として介していた。二子塚遺跡後期Ⅰ段階の住居は遺跡のほぼ中央部に建築が始まるが、住居の高密度の集中は遺跡の中央から南半にかけての地域にあったとみられる。環壕にはⅠ段階の土器は含まれていない。したがって二子塚集落は造営開始期には環壕をもたなかったのである。



図 351 弥生時代後期集落と周辺の地形（二子塚遺跡）

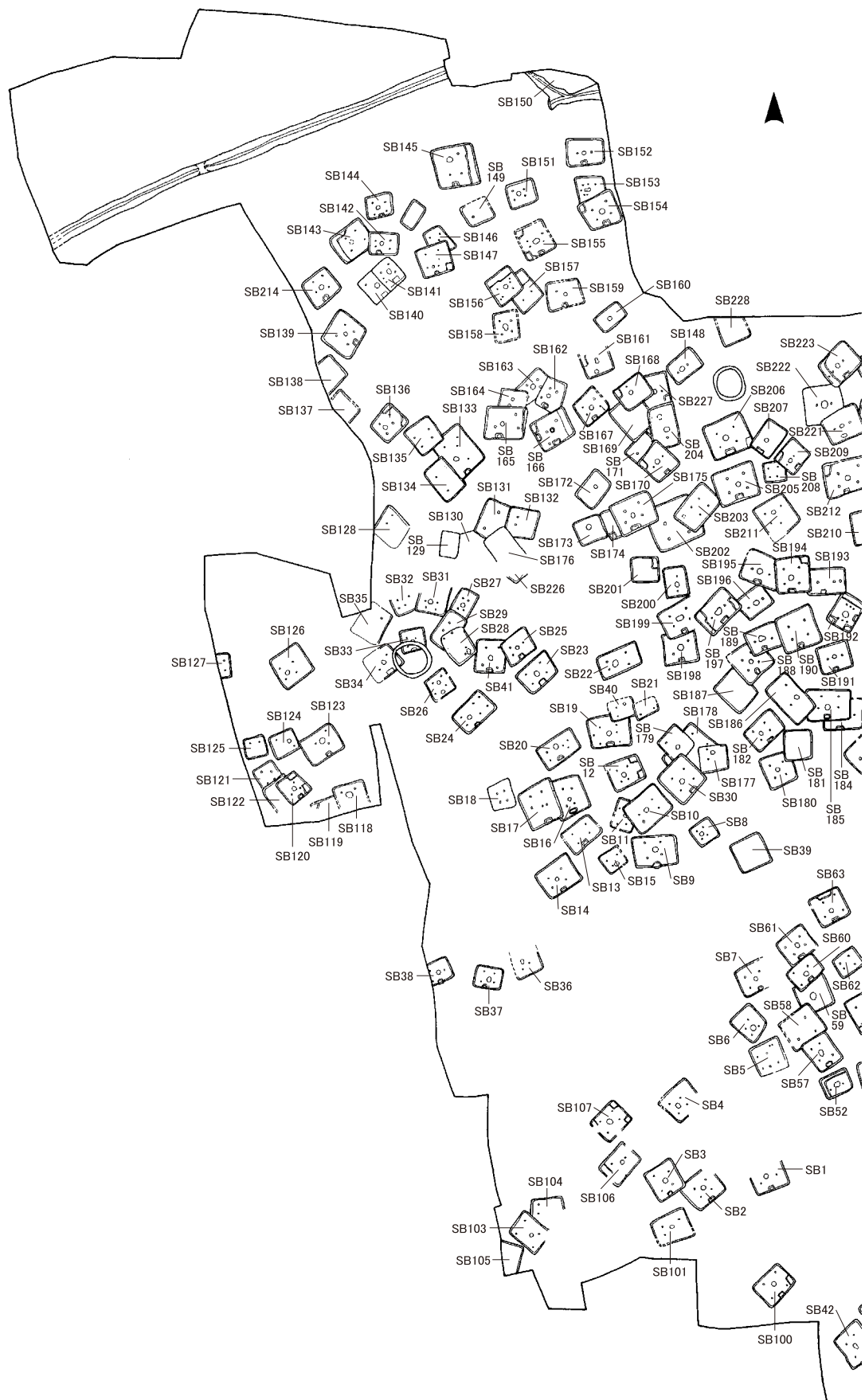
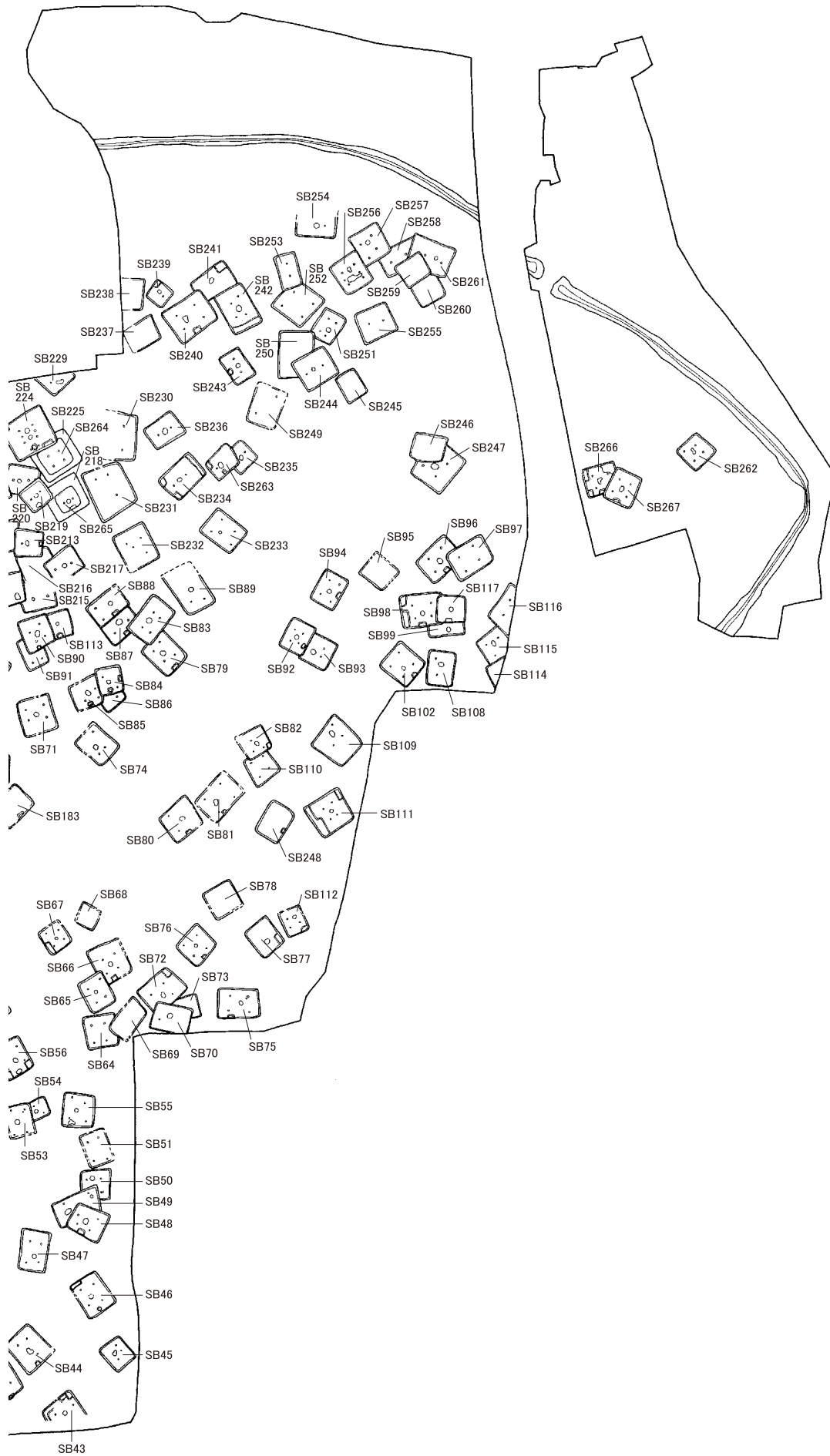
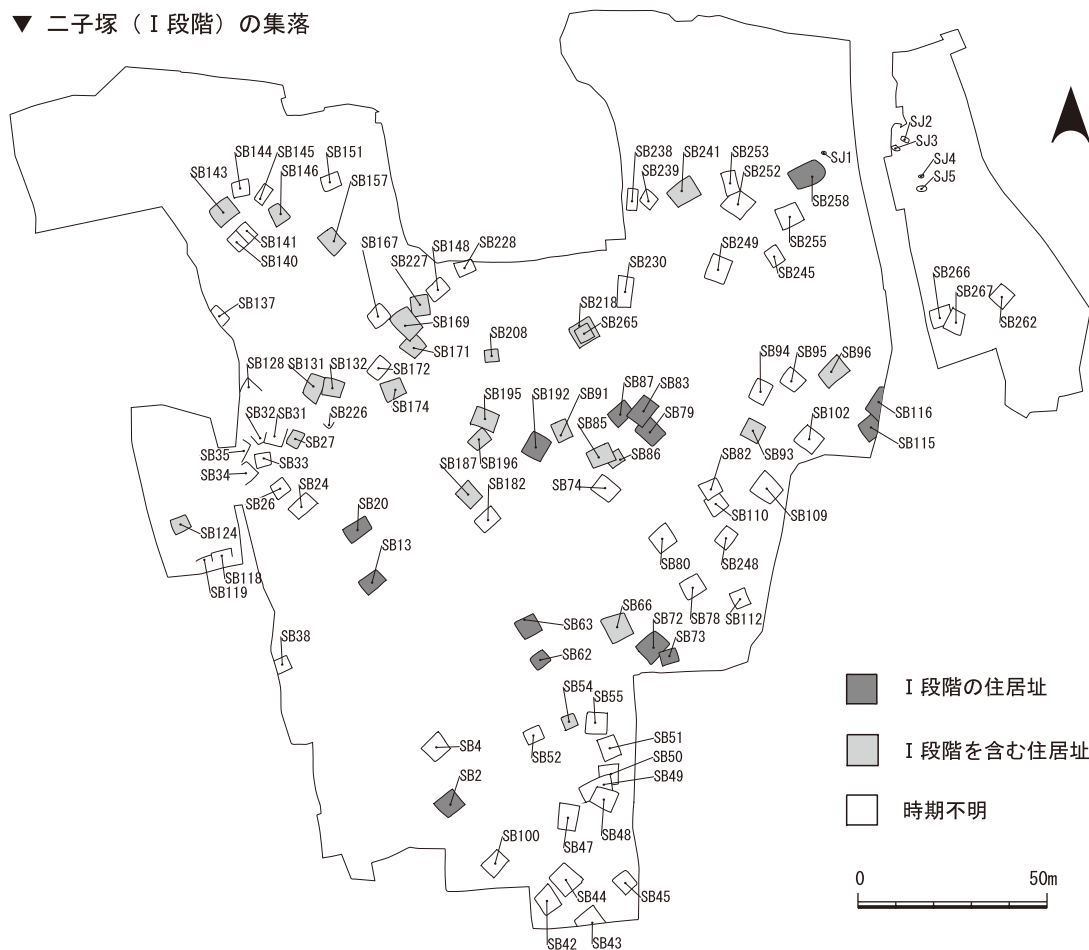


図 352 弥生時代後期の集落 (二子塚遺跡)



▼ 二子塚（Ⅰ段階）の集落



▼ 二子塚（Ⅱ段階）の集落

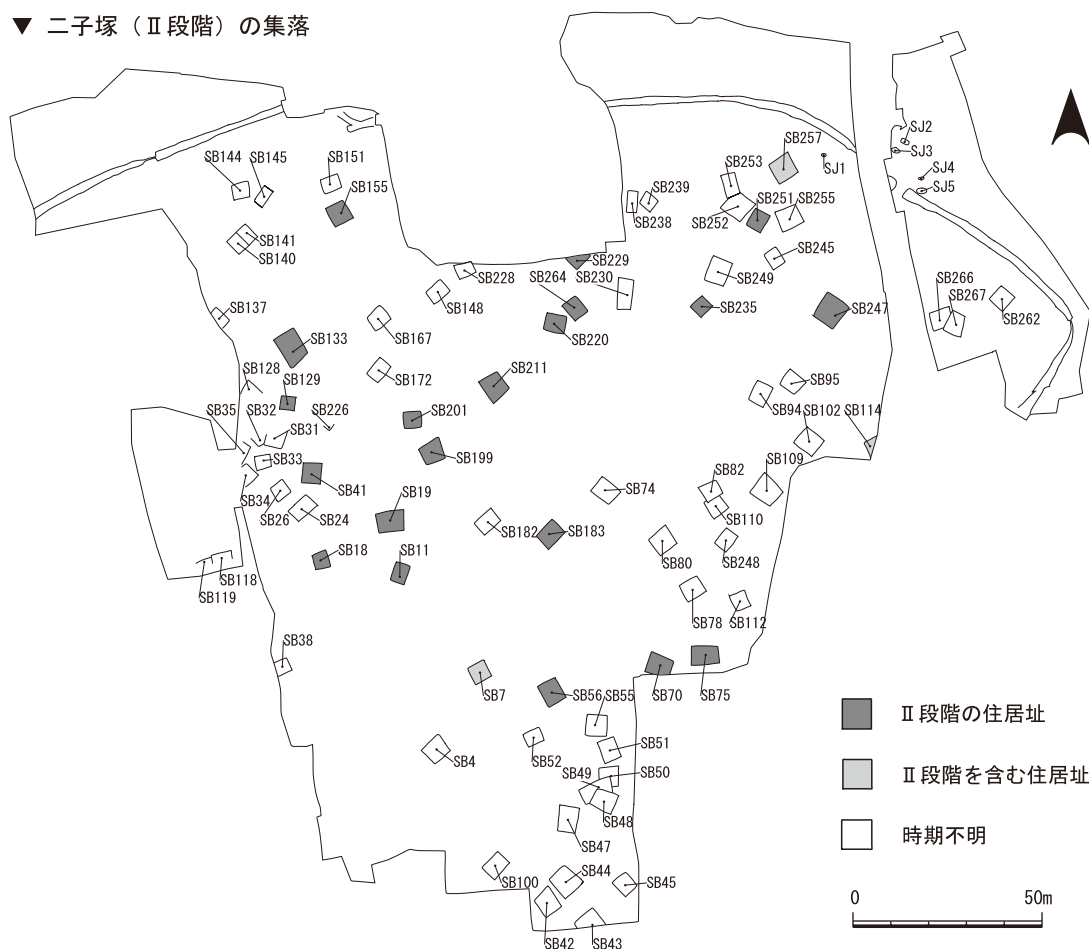
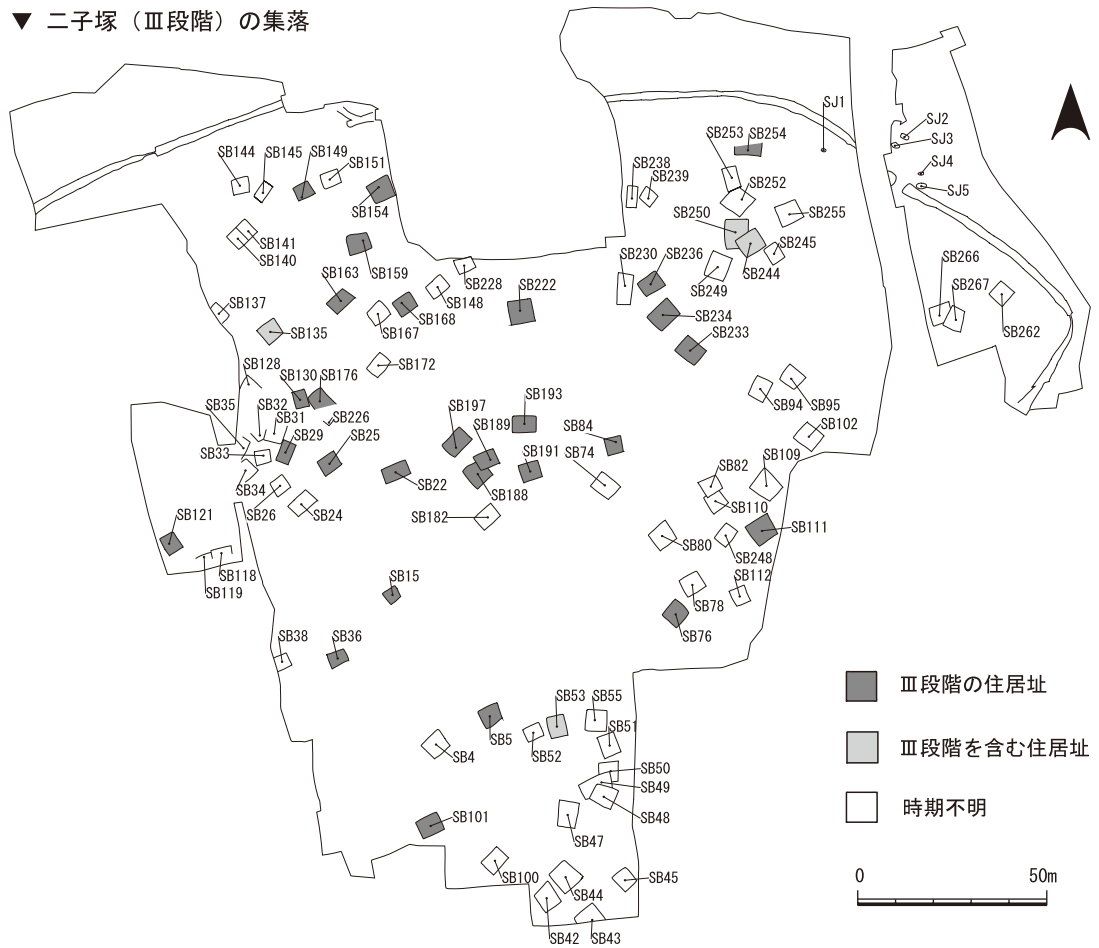


図 353 二子塚の集落変遷（Ⅰ，Ⅱ段階）

▼ 二子塚（Ⅲ段階）の集落



▼ 二子塚（Ⅳ段階）の集落

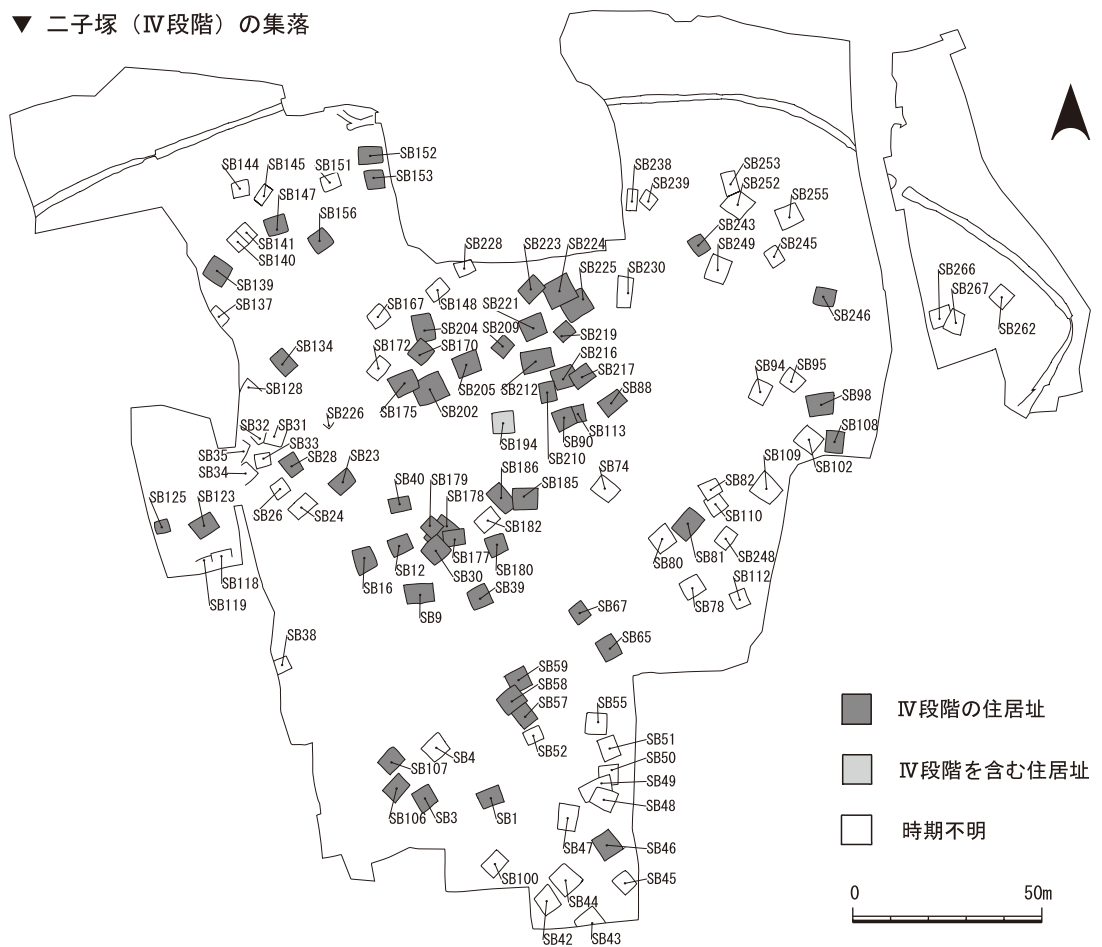


図 354 二子塚の集落変遷（Ⅲ，Ⅳ段階）

▼ 二子塚（Ⅶ段階）の集落

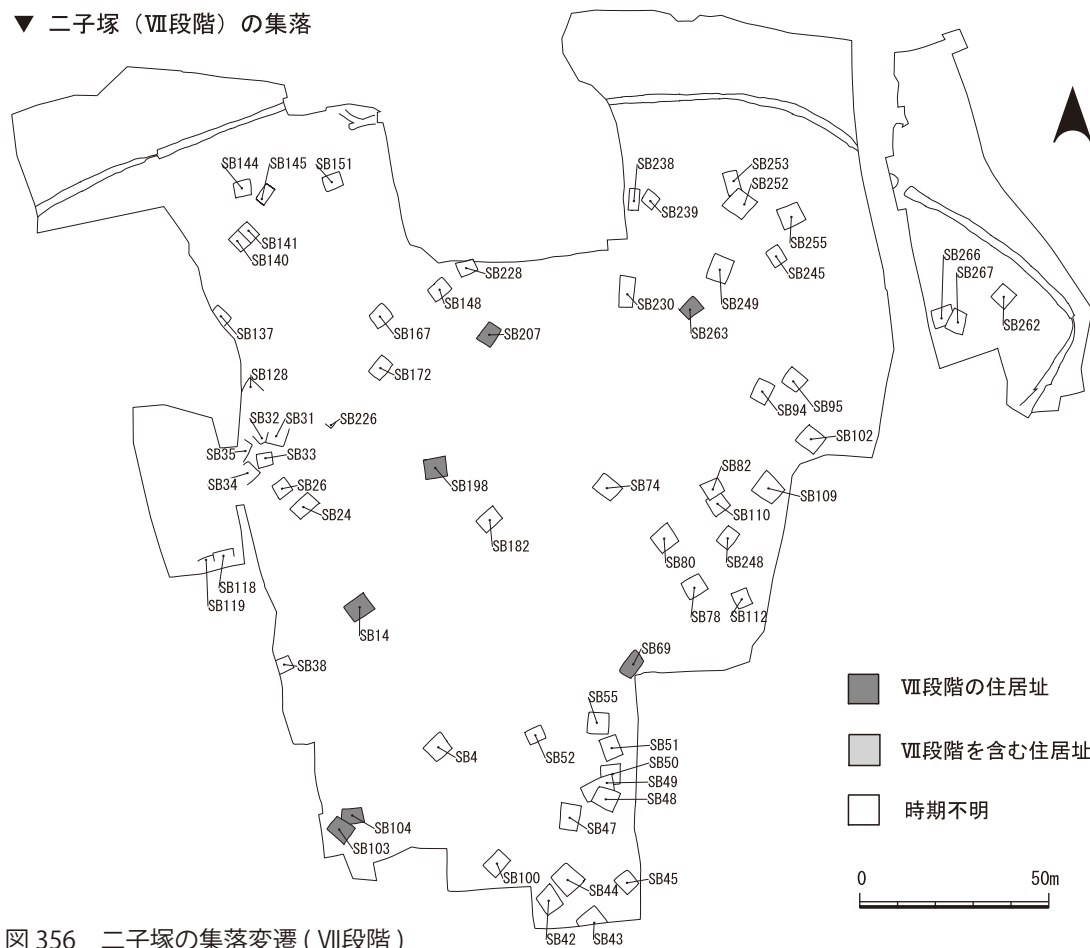


図 356 二子塚の集落変遷（Ⅶ段階）

そしてⅡ段階には居住域が北へ、東へとやや拡大するが、この時期に環壕が掘られたとみられる。環壕には集落への入り口、すなわち掘り残しの陸橋が設けられた。その場所は調査区の北東部で、その外側には陸橋に接するように中期の甕棺墓が既に存在していた。もし、甕棺墓群が立石、土饅頭等、なんらかの墓標を備えていたと考えるならば、墓標を両側に見ながら集落に入ることとなったであろう。このような前代の墓の存在と環壕集落の入り口の設置との間に関係があったかどうか、想像の域を超えない。とは言え、積極的に因果関係があったと認めるならば、先人に対する敬意や記憶が後期集落の造営に影響を与えていたと考えることができるであろう。また全住居址の分布をみると、この陸橋部分から入ると左手側に広い遺構の空白部分があり、また南西方向に向けて遺構分布の空白帯が認められ、その幅は平均して約 20 m を測る。この空白帯を当時の道路とみなすことは安易ではあるが、最もあり得る評価であろう。ただし、この空白帯を集落を二分する境界と考え、集落展開に関してより複雑な解釈を与えることも可能である。ここでは、これ以上足を踏み入れることなく、論の展開に従って解釈を示したい。

3 集落の展開

後期集落はⅢ段階以降、集落北縁の環壕付近まで広がり、Ⅳ段階に最大規模となる。これより後は、それまで環壕以南に万遍なく広がっていた住居址も減少傾向をみせるようになり、Ⅴ段階には中央から東半部に偏った分布をみせ、Ⅵ段階には集中域を中央より北西側に移すようになる。そして最終段階のⅦ段階には住居数の激減という事態を迎え、土器から明らかにこの時期と断定できる住居址は 5 軒となる。すなわち、集落はある段階に急に消滅したのではなく、Ⅴ段階、Ⅵ段階と住居が減少し分布に偏在する不安定な段階を経て、集落最小規模のⅦ段階を介して消滅したのである。

さて、上述のような集落の成立と展開を、遺物や生産遺構の分布からみてみよう。

青銅鏡破片が出土した住居址は、SB4、67、86、148 の 4 軒である。SB67 がⅣ段階に属し、SB86 がⅢ段階以前に属するが、SB4、148 は時期判定ができない。時期が特定できる青銅鏡片は 2 個体であるが、いずれも集落の興隆期に遺棄されていることが判明しよう。なお、最初期に遺棄された SB86 の青銅鏡破片は、舶載鏡を素材とした破鏡である。出土青銅鏡破片の特徴は、その分布にも表れている。SB4、67、86 は、

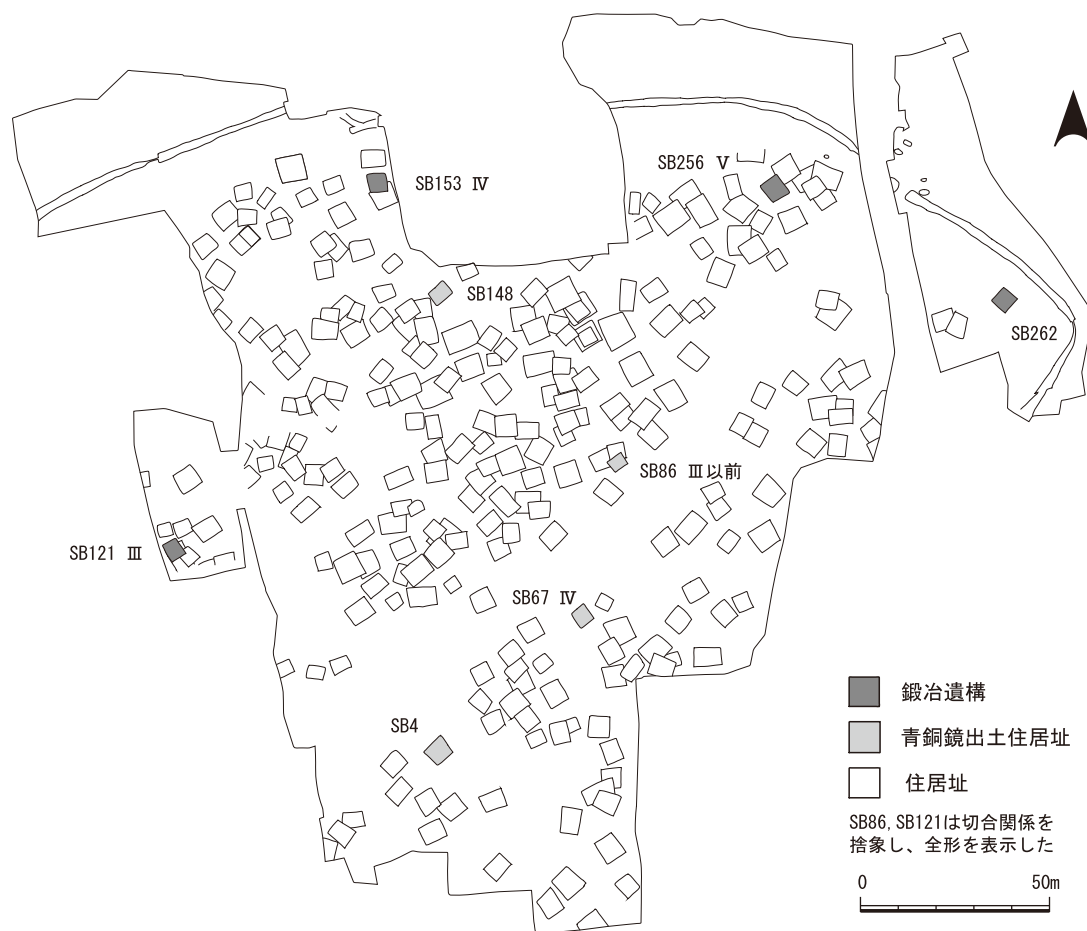


図 357 鍛冶遺構または青銅鏡が出土した住居址 (二子塚遺跡)

遺構の空白帯に面している。そして、周囲には密接しないものの住居が存在し、集落全体の中では、縁辺ではなく、中央に凝集する位置を占めているのである。

さて、陸橋から南西に一直線に伸びる遺構の空白地帯は人為が造りだしたものとして評価できるであろう。出土土器や遺構の切合関係からも時期を決定できない住居址が多いため、その人為的に創出された空白地帯を十分に解釈することはできない。単純に考えれば、これを「道」と評価することができる。しかし、各段階において必ずしもこの空間が維持されているかというそうではない。Ⅰ段階はいまだ環壕がなく、集落への入り口は前代の墓葬との関係で意識されていた可能性はあるが、集落内にあえて道を設置する必要はない。Ⅱ段階は集落の中心域は楕円形の広場状の空間となり、道状あるいはベルト状を呈するわけではない。そしてⅢ段階、Ⅳ段階と道状の空白地帯が顕著に浮き彫りとなってくる。

そう考えるとこの空白地帯を道という解釈に閉じ込めるのではなく、その解釈の選択肢が他にもあってよいのではなかろうか？この二子塚の集落自体、弥生時代後期中葉に出現する時点で、すでに複数の集団が同居を開始する。出自を異にする集団が一つの集落空間に同居する際、この空間の中に二分的な現象が起こるということも想定できよう。この集落遺跡を北西住居集中区—空白地帯—南東住居集中区と表現した場合、二つの集中区が空白地帯をはさんで向き合っていたのではなく、相互に背部を向けていたことも考えられる。条溝で区画された居住空間の中に、さらに区画があるという解釈であるが、道という解釈とともに今後も他の集落遺跡で検討ができればと考える。

二子塚遺跡で確認された鍛冶遺構は、SB121、SB153、SB256、SB262の4軒である。SB121がⅢ段階、SB153がⅣ段階、SB256がⅤ段階に属する。集落北東隅に位置するSB262は土器の出土もなく、他の遺

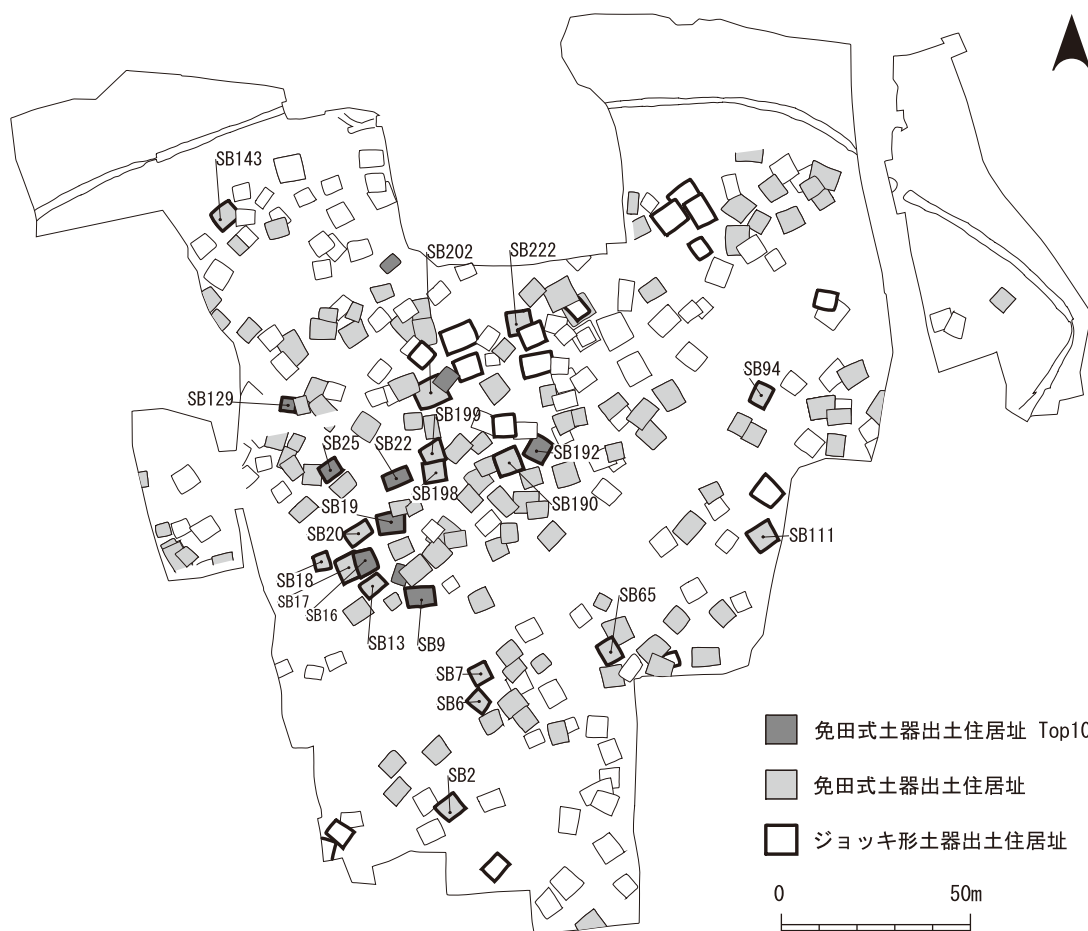


図 358 免田式土器とジョッキ形土器の分布 (二子塚遺跡)

構との切り合い関係もなく、その時期判定ができない。ただし、各期の集落様相を考えると、Ⅰ、Ⅱ段階の住居分布域と SB262 とは離れすぎているように思える。また決定的な理由とはいえないが、鍛冶遺構がⅢ段階からⅤ段階にかけて西から東へと遷移していることも、SB262 の所属時期を示唆している。

鍛冶工房は各時期において集落の縁辺に営まれた。縁辺の占地に対しては様々な理由が考えられる。例えば、火を使用する工房であるために、火災を起こす可能性が高く、他の住居への延焼を回避するという目的もあったであろう。また、二子塚集落が鍛冶工房を保有していることを、外部に向けてデモンストレーションしていたのかもしれない。特にⅤ段階の SB256 は集落縁辺でもあるが、先述の遺構の空白帯にも約 10m と接近しており、外部から集落へ足を踏み入れるとすぐ右手に鍛冶工房を目にするということになる。そうするとデモンストレーションという目的を読

みとることとなる。

二子塚の弥生後期集落はその成長期であるⅢ段階に鍛冶工房を保有するにいたり、鉄器の自給ができるようになった。Ⅰ、Ⅱ段階は必要とする鉄製品がある場合でも、他の集落における生産品や流通品に依存する他なかった。しかしⅢ段階以降、集落規模の拡大と維持期には鍛冶工房を保有し、SB262 をⅥ段階と仮定することができれば、Ⅰ、Ⅱ、Ⅶ段階という集落が小規模な段階では、反対に工房を有することができなかったものと認めざるをえない。

二子塚遺跡は集落の盛衰と鍛冶工房の保有とに密接な関係があった。ただし、鍛冶工房を保有することが集落が次代へ存続するための必須条件ではなかったことも同時に物語っている。